

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 戴名世・方苞の交遊より見たる桐城派古文の成立  |
| Sub Title        | The prose of the Tongcheng school   |
| Author           | 佐藤, 一郎(Sato, Ichiro)  |
| Publisher        | 慶應義塾大学藝文学会  |
| Publication year | 1963  |
| Jtitle           | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.16, (1963. 10) ,p.41- 57  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00160001-0041">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00160001-0041</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 戴名世・方苞の交遊より見たる

### 桐城派古文の成立

佐藤一郎

一、

清朝の散文を代表する桐城古文〔註1〕の創始者の名は、もっぱら方苞のうえに輝いている。事実後世に及ぼした影響の点で彼に肩を並べる者はないのであるが、南山集事件のため戴名世が捕えられ刑死するまでは、安徽省桐城県は同時に二人の有名な文学者を持っていた。居所の南山で知られる戴名世と、号の望溪で知られる方苞の二人である。相手より十五も年上なのにそんなことにはこだわらずに、方苞と親しい友人関係にあった戴名世が、康熙五十二年（一七一三）に文字の獄に斃れ、その文集である南山集が禁書に指定されたため、桐城古文の師弟継承は自然に方苞の系統に限定されてきたのだった。劉大櫟・姚鼐とつづく間に、方苞理論の權威は確立された。戴名世には方苞における「義法」のような、牽引力の強い理論がなかったことも、この傾向を助長したにちがいない。たとえ戴名世の文章に同情を抱いていたにせよ、事件から六十数年後の乾隆四十四年の編纂に係わる姚鼐の『古文辞類纂』では、まだ彼の文章を収めるのは困難であったろうが、次第に禁が弛められ、道光二十一年即ち死後百数十年を経ると桐城の徐宗亮が尤本を増補編集し、以降光緒年

間に王哲鏡堂本の刊行を見、黎庶昌の『続古文辞類纂』（光緒15 1889）では戴名世文を相当数採るに至っている。民国に入ると蘇州の振新書

社から、国学基本叢書所収本の『戴南山文鈔』と同系統の『戴南山・方望溪先生文鈔』が刊行され、ようやく双壁の様相を恢復するが、不思議に新中国になってふたたび名世の存在がうすれかけているようにみえる。清朝の言論弾圧事件の犠牲者である彼が、新中国でひくく評価されるわけがないのに、北京大学および復旦大学の『中国文学史』に、彼の名前すら見当たらないのは、なぜであろうか。その間の事情を推測するに、彼の文学はやゝ理論的な支えがうすいので文学史的な整理がつきにくいためか、さもなければ文学史家にその価値を見落されたとも考えるより仕方がない。一方、劉声木の『桐城文学淵源考』、桐城文学撰述考』でもその名は除外されている。そこでわたくしは、やゝもすれば不当な取扱いを受けてきた戴名世に、南山集補遺の編者である桐城の張仲沅と共に、同情の一文を綴らざるをえない。張氏は次のようにいっている。「如望溪海峰姬伝諸先輩、皆有全書伝誦海内、迄今不衰。独南山先生、以文字遭禍、書遂散佚不伝、僉為太息者久之。」

そしてさらに、この南山集事件をめぐる戴方両氏とその周辺の動きを探りながら、桐城文壇成立期の状況を述べ、ここに含んでいるいくつかの問題点を指摘して行きたいとおもう。それには順序として、二人の経歴・性格・業績を伝えている文章を、それぞれの文集中に求めることから始めよう。

## 二、

まず戴名世について。その生前に弟子尤雲鵬により刊行された『南山集』巻頭に、事件に際して問題となった方苞の序がある。この序は簡潔で本質的な戴名世論を形成しているが、方苞が逮捕されるに至った主要な原因は、戴名世の文集中に方孝標作ところの『滇黔紀聞』を、姓のみ記して名をいわずに「与余生書」および『子遺録』などで引用してあったため、『滇黔紀聞』の作者と間違えられたからである。この点の嫌疑は晴れても、悪いことに方孝標は方苞の一族であるという理由は消滅せず、序文の筆者であることも動かなかった。この序文は『方望溪集』には収められていない。また道光年間に桐城の蘇惇元が編纂した『方望溪先生年譜』では、その康熙五十年辛卯の項で、「先生以集序列名、牽連被逮、下江甯臬獄、旋解至京師、下刑部獄、其序文、実非先生作也。」と、敬慕する方苞

のために弁護しているが、内容・文体および証拠からいって、彼自身の筆になることは確かである。後で述べるように戴名世もその自供書のなかで、方苞の筆であることを承認しているのである。さてその序文の冒頭、

「壬午之冬、吾友褐夫、卜宅於桐城之南山、而帰隱焉。余自有知識、所見聞、当世之士、学成而並於古人者、無有也。其才可拔以進於古者、僅得數人、而莫先於褐夫。」

と、わが友である褐夫（名世の字）の才をたたえ、ついで初対面の際の相手の言葉語る。

「始相見京師、語余曰、吾非役役於是、而求有得於時也。吾胸中有書數百卷、其出也自恃將有異於人。非屏居深山、足衣食、使身一無所累、而一其志於斯、未能誘而出之也。其後各奔走四方、歴歲踰時、相見必以是為憂、余亦代為憂。而自辛未迄今十余年、而莫遂其所求。」

初対面の康熙三十年辛未には、數年前に選貢生を以て知県の資格を獲得してはいるが、すでに戴名世三十九歳（以下數え歳）、方苞二十四歳で大学入学の歳、いずれも文名のみいたずらに高く、身分はただの秀才の頃であった。そして方苞は、著名な文章家にして同時に政府の要人である李光地と韓菼の知遇を得ているという背景はあるが、先輩の戴名世をまったく友人扱いすれば、一方、戴名世もこの相手に最初から百年の知己に遭えるように、日頃の抱負を語って止まなかった。学問に志をもつ処士を、高位高官にある者ですら賓客の礼を以て迎えるしきたりの社会で、同じく文章に自己の前途を見出そうとしている同郷の者が、異郷に相会ったのである。たとえお互にたいへんな自信家であり、めったに相手にへりくだらない者同志だとしても、ただちに肝胆相照らす仲になって、なんの不思議もない。

彼等は共に近くは帰有光を尊敬し、基本的には『史記』の精神の繼承を企だてていたが、戴名世には目前の事実を記録しようという意志があり、方苞には古来の義法を明かにしようという心構えがある。前者はや、道教的で、また山水の趣味もあるが、後者はより多く儒教的であり、趣味生活に乏しい理論家である。だが互に相手の主張に同化するような人間ではないし、二人の年齢差の意味する経験の差は、明末清初の激変期にはとくに大きいはずである。この年齢差が彼等のその後の生き方を決定するうえには働いているが、その交際には響いていないとすれば、とくに年長の戴名世の側における「……往来燕趙齊魯河洛吳越之間、喜談大史公書考求前代奇節瑋行、時

時著文、以自抒瀟鬱氣逸發不可控御。諸公貴人畏其口、尤忌嫉之。」〔清史稿「文苑一」〕と評されるような自由闊達の精神のひとつの現れであり、その人生観につながるものであろう。

そして二十四歳の方苞については、前掲の『方望溪先生年譜』に次のように見える。「巨公貴人、方以收召後學為務。天下士集京師、投謁無虛日、公卿爭相汲引、先生非先焉不往。於是益見重諸公間。〔見沈伝及韓公評語家譜〕一意為經學。先生入都、〔註3〕万季野先生〔註4〕（名斯同）独降齒德与之交。」

高官たちが先方から訪問してくるのでなければ、会いに行かない。そして明史研究の第一人者であり、博学鴻詞の推薦を謝絶している四十歳から年長の万斯同と、対等の交際をしようとしている。この場合も相手が硬骨の野人であり、権力に近づかない自由な精神の持主なので、その才を認めてやゝ不遜な態度を許したのであろう。さて、戴名世と方苞はこのようにして相逢うが、もうしばらく戴名世を語る方苞の文章を追うことにしよう。

「窘若囚拘、終身而不息、尚何暇學古人之學、而冀其成耶。故士窮愁、則必不能著書、其事若与古異。」〔故士以下、本に異同多し〕と、生活のためにあくせくしながら學問に志したが、学の成就するような環境ではないことを述べ、つづいて彼の八股文と古文について次のように評価して、その今後を期待する。

「褐夫少以時文發名於遠近、凡所作、賈人隨購而刊之。故天下皆稱褐夫之時文、而不知此非褐夫之文也。其載筆墨以遊四方、喜述旧聞、記山水之勝、而以佞序說請者、亦時時應焉。故世復稱其古文、是集所載是也、而亦非褐夫之文也。蓋至今感其胸中、而未得一出焉。」

ほんとうに戴名世の才力に挨たなければならぬ仕事は、初対面の際の嘆きのままに、果されかねていると方苞は見ているのである。そして先輩をおゝいに激励して、

「褐夫之年長矣。其胸中之書、繼自今而不出、則時不贖矣。必待身之無所累而為之、則果有其時耶。故余序是集、而為褐夫憂者倍切焉。因發其所以使覽者知褐夫之志、而褐夫亦時自警、而亟成所其志也。同學方苞謹」

と、この一文を結んでいる。方苞はこの文章のはじめで、戴氏の才は当世稀に見るところであるが、生活に追われてその能力を充分發揮できないことを惜み、それぞれの場面にもっとも適切なエピソッドを紹介しているが、主題は最後まで一貫していてすこしも無駄がない。文字の選択は嚴格そのもので、誠実な人柄がにじみでている。それでいながら、思い切ったことを大胆にいつてのけている。この文章が方苞の文章でなくて誰の文章であろうか。

方苞はこの外に、戴名世を主として、語った文章はないようである。あるいはあったのかも知れないが、通行本には収められていない。それでいながら方苞の文集を通読して、あまりに多く南山集事件にふれた文章を見出して、驚く人もあるかも知れない。「獄中雜記」「結感録」「兩朝聖恩恭記」のようなまとまった文章のほかに、いたるところに南山集の文字がでてくる。これは彼の生涯でもっとも深刻な体験であることを物語っているが、戴名世の名前はそこには見出せない。しかしながらここには、自分の深刻な体験としての南山集事件と共に、文字の獄に倒れた亡き友を記念する言外の意味がありそうにもおもわれる。

では、戴名世の側から方苞を語った文章はどうか。これはまことに、質量共に豊富であり、しかも当の方苞のみではなく、その父の仲舒字は逸巢、兄の舟字は百川との親交を証明する多くの文章を含むのであるから、方苞の一族との関係は、密切であるという外はない。すなわち方苞について「方壺臬稿序」があり、文中方苞にふれたものには「齊天霞稿序」<sup>(註5)</sup>「与劉大山書」<sup>(註6)</sup>「徐詒孫遺稿序」<sup>(註7)</sup>「自訂時文全集序」<sup>(註8)</sup>「乙亥北行日記」<sup>(註9)</sup>の多きを数える。その他、彼の父を語るものに「方逸巢詩序」<sup>(註10)</sup>、兄をめぐって「方百川稿序」<sup>(註11)</sup>「方舟伝」<sup>(註12)</sup>がある。以上にはもちろん方苞の名前もでてくる。また兄の方舟にふれたものに「辛巳浙江日記」「程偕柳稿序」があり、その一家すべてと親密な交際をしていたことは、あまりにも明かである。

康熙三十八年執筆の「方壺臬稿序」の冒頭でいう。「始余居鄉年少、冥心独往、好為妙遠不測之文、一時無知者。而鄉人頗用是姍笑。居久之、方君靈臬与其兄百川起金陵、与余遥相應和。蓋靈臬兄弟亦余鄉人、而家於金陵者也。」

若年のころから戴名世が才氣煥発の文を書いていたこと、おなじく桐城出身の方苞一家が金陵(南京)に居をかまえ、文章の道にいとしんでいたことがわかる。名世が金陵に移り住むようになるのは、三十四年のころからであり、彼らの間はこれよりいよいよ親密の度を加えてくる。<sup>(年譜。三十四年の頃。…是時、先生已移居金陵矣。)</sup>

さらに戴名世はつづけて、

「始靈臬少時、才思横逸、其奇傑卓犖之氣、發揚蹈厲、縱横馳騁、莫可涯涘、已而自謂弗善也。於是收斂其才氣、潛發其心思、一以闢發義理為主、而旁及于人情物態、雕刻鑷錘、窮極幽渺、一時作者未之或及也。」

と、その文章に讚辭を呈したのちに、彼自身との交友關係について述べる。

「蓋靈臬自与余稍往復討論、面相質正者且十年。每一篇成、輒拳以示余。余為之点定評論、其稍有不愜于余心、靈臬即自毀其稿。」  
あの方苞がこれほど相手を信頼するのは、心から名世を敬愛しているからにちがいない。すなわち、

「而靈臬猶愛慕余文、時時循環諷誦、嘗拳余之所謂妙遠不測者、彷彿想像其意境、而靈臬之孤行側出者、固自成其為靈臬一家之文也。  
靈臬於易春秋、訓詁不依傍前人、輒時有獨得。而余平居好言史法、以故余移居金陵、与靈臬互相師資。」

方苞と戴名世はたがいその才能を認め、作品を批評しあつたのである。その方苞が人に招かれて金陵を去る際に、戴名世にこの序文の執筆を求めた。あの天下に文名かくれなき靈臬が「屬余為序、而行之于世。」といふのである。「嗚呼、自余与靈臬兄弟、相率刻意為文、而侘傺失志、莫甚于余。回首少時以至于今日、已多歷年、所為冥心独往者、至今猶或貽姍笑」それにひきかえ、自分はこんな有様であるが、「今幸靈臬以其文行于世。而所謂維持拯救正之者、靈臬果与有責焉。」で、まことに意を強くするにたるといふわけである。

二人の文章はひとしく文集の序であり、比較するのに好都合だが、われわれはここにその心の交流と共に、個性の違いを見出すことができる。文章の技巧を見るには、技巧をとくに凝した文ではないので比較するのにやゝ困難を感じるかも知れないが、その風格は充分にしるべよう。後輩方苞にむしろ先輩を激励する態度があり、戴名世には多愁多感沈痛な面持ちが窺われる。これは二人の個性の違いであると共に、二人の経験した歴史体験の違い、明末清初の激変をどう生きたかの問題にかかってくる。太平の世の中であつたなら問題にならなかつたかも知れない民族の命運と自己の生き方の問題がここにも反映しているのではなからうか。

### 三、

南山集事件は清朝の文字の獄のうち、その代表的なもののひとつである。まだ明の政權がほそぼそと余命を保っていた順治十八年に

朱国楨の遺著に莊廷鑑が手を入れて『明書』として出版したことから、莊氏〔註15〕一族をはじめ関係者七十四人が死刑となったのがそのはじまりであり、同六年には沈天甫が明末文人の詩集を偽作して棄市せられ、同二十一年には朱方且が邪説を称えて殺されたのであるが、康熙五十一年には戴名世事件で一時は連坐するもの三百人にのぼり、雍正年間に入ってからも、呂留良・曾静・張熙等の大逆事件その他があり、しまいに禁書リストの「清代禁書目録」など千五百種を越える国禁の書が並ぶ有様となった。

ところが一般には、康熙帝は古来まれに見る英明な君主として知られている。帝は漢民族とその文化を尊重すると共に、巧みに被支配民族を骨抜きにすることを計った。減税とか科擧の試験などで人心を収攏しながら、一方では民族主義的傾向を抑圧するために雍髪戦争を強行し、文字の獄・禁書令など言論弾圧の手段に訴えてきたのである。つまり硬軟両種の使い分けがあざやかだったために、康熙帝は名君の名前をほしのままにすることができたのだ。

このような専政君主のもとにあつては、臣子たる者はその言論・行動に充分すぎるほど気をつけなければ生きのびることは不可能である。戴名世もいつそのことせんぜん仕官せず、その愛した山林に隠棲して生涯を終える覚悟だったら、話はおのずから別であろう。彼は清朝の年号でいえば、康熙帝即位よりさらに九年さかのぼった順治十年の三月十八日（旧曆）に生れ、明の年号でいえば最後の皇帝永明王（桂王）の永曆七年の生れということになる。まだ南中国の各地で明清両軍の戦鬪がさかに行なわれていた頃に少年時〔註16〕代を過したのであるから、明の命脈が尽きて康熙帝が立ち、清の支配体制が完全に固まっても、より若い世代のように、すっぱりそのなかに融こむわけにはいかない。といつて遺老たちのように、明朝の禄を食んだり、あるいはその支配体制下で生活をした経験はないから、先朝を追慕する気持は強くても、自分の将来を投げ棄てて追慕の方向だけに生きられようはずがない。彼はこの矛盾に苦しみながら科擧の試験を受け、各地を幕客または家庭教師としてめぐり歩き、文士生活を送るのである。諸方を転々としても康熙二十一年に生涯を閉じた顧炎武のように、その間に抵抗を組織しようというような深慮遠謀を秘ていたわけではない。仁徳高い康熙帝治下でいくらか寛大になった言論の自由の範囲の測定を誤り、つい一步を踏みはずしたために、南山集事件の悲劇が発生したのである。彼には明朝に殉ずるだけのつきつめた気持がなかったと想像されるだけに、一世の才子の最後にはいっそう痛ましいものがある。



#### 四、

順序として南山集事件に至る彼の経歴を、もうすこし詳しく見てゆくことにしよう。彼の伝記には『戴南山先生文集』の「南山先生年譜」、徐宗亮の「戴先生伝」、蕭穆の「戴憂庵先生事略」(「碑伝集」補八)、「清史稿」文苑一などがあるが、「南山先生年譜」と「戴憂庵先生事略」がもっとも詳細である。しばらくこの両者の記述および戴名世自身の手になる「先君序略」「書先世遺事」に従うと、父は諱を頤字を孔万号を籍巖といい、その二十一歳(「年譜」二十一歳)の時の子である。順治十年三月十八日誕生。翌年父は博士弟士員。清朝の高等文官試験に応募したくらいだから、薙髪した曾祖の気概はない。しかも父は官途に志しても、生涯秀才以上の資格を得ることはできなかった。戴家は土地の素封家であったが、明末清初の社会変動のなかで没落し、父は康熙十九年十一月、四十八歳で亡くなるまでの間、家をおとに転々と住込みの家庭教師をして暮し、からくも家計を支えるような状態だった。名世は六歳から塾師につき勉強をはじめた。しかし彼も二十歳を過ぎると、「先君子束修之入、不足以給饔飧、余亦謀授徒以養親。」(「年譜」「自訂」「時文集序」)という状態なので家計を助けるために、やはり家庭教師を勤めるようになる。この貧困は、彼の学者としての望みを絶つ働きをし、文章家としての道を自覚的に進むように仕向けたのである。その生前の文集の序「初集原序」にいう。「夫文章之事、固天之所以与我者、非可以人力与也。」とは信ずるが、折からの考証学の勃興を目前に見る時、学問には未練を抱きながらも、ついに別の世界に隔てられてしまったような気持ちに陥るのを禁ずることはできない。「余生二十余年、迂疏落寞、無他芸能。而竊嘗有志、欲上下古今、貫穿馳騁、以成一家之言。顧不知天之所以与我者何如。妄欲追跡古人、然家無藏書、不足以恣其觀覽。又其精神心力、困于教授生徒、而又無相知有氣力者、振之于泥塗之中。」

つねに抱きつづけた学問成就の望みを、かなえる環境にないことで、世の中に対する反抗心いっそう強まった。「余与崑繩(王崑繩)行歌燕市、一市人皆笑之。」(「贈劉繼莊還洞庭序」)のような奇矯な行為や、次の諸文に示されるような多くの敵は、たしかに嫉妬や、主義趣好の違いにもよるが、その奔放不羈と見なされるような態度も、この傾向を助長したのであるう。「余居郷、以文章得罪朋友、有妬余者、号於市曰、逐戴生者視余、羣兒徒之紛如也。久之、衡文者貢余於京師、郷人之在京師者、多相戒勿道戴生名。」(「贈蕭端木

序)

また、「年少身賤、而慨然有志於文章之事、其見惠於時文之徒、且十余年於今矣。」(「与白藍生書」)と。

彼の性格や環境・立場は、また目上の人からも「諸公貴人畏其口、尤忌嫉之。」(「清史稿」文苑一)と警戒されるのだが、これは彼が明の遺老の伝記や明末の史実に強い興味をもっているのである種の危険を予測させることになったのではなからうか。以上により戴名世の交際範囲は、おのずから限定されてくる。まず目上の人から挙げていくと、彼の文章を買う少数の有力者および彼の文章力を評価して幕客として招いたり、家庭教師としての仕事を支えた者が考えられる。まず政府の要路の人物としては、康熙三十九年、四十八歳前後に姜公、名は櫛<sup>註18</sup>、字は崑麓<sup>註19</sup>があり、「詩文教令、多出其手。」(「年譜」)のような有様だった。浙江学使から吏部侍郎を勤めた姜櫛の代作をしたというわけである。住込みの塾師をはじめたのはこれより早く、康熙三十年三十九歳の時には、式部官の太常李愚庵宅にあった。彼の師匠格の人としては、康熙十八年二十七歳の項に督学使者劉木齊の名があり、翌年には秀才。以降しばしば郷試に応募するが受らず、そのまま康熙四十四年五十三歳まで及第しなかった。この歳の順天郷試の主任試験官は、錢塘の汪霽である。この汪こそは南山集事件の際にはすでに鬼籍に入っていたにもかかわらず方苞と不思議な因縁を結ぶに至る、康熙帝のお覚え目出たき文学者である。博学鴻儒に挙げられ、官は編修から戸部侍郎に至った。彭紹升の『故光祿大夫文淵閣大学士李文貞公事状』すなわち李光地の伝にいう、「桐城貢士方苞、坐戴名世南山集序論死。聖祖一日言汪霽死無能古文者。公曰、唯戴名世案内、方苞能已。而苞得積、召入南書房。公之護惜善類、啓迪聖聰、多此類也。」と。また当の方苞の「安溪李相國逸事」では、さらに一步を進めて、戴名世弁護の状況を次のように述べる。「戴名世以南山集下獄。上震怒。吏議身礙族夷、集中掛名者皆死。他日、上言、自汪霽死、無能古文者。公曰、惟戴名世案内方苞能。叩其次、即以名世對。左右聞者、無不代公股票。而上亦不以此罪公。」

雍正帝の師たるにふさわしい大勇の持主といえよう。そして名世を舉人に選んだ汪霽も、南山集事件に際し、方苞を死地から救う役目を担ったのだった。弁護を買って出た李光地は、方苞二十四歳の時にその文章を見、「韓・歐復出。北宋後無此作也。」と嘆じた古文の大家で、康熙帝の信頼する老臣である。この李光地はまた、康熙四十八年の会試の總裁であるが、戴名世はこの試験で一甲第二名、榜眼の榮譽をになったのだった。(方苞は三年前に、四位で進士。總裁は李録予)李光地の門弟中の優等生というわけである。時に名世は五十七歳。六十一歳で

刑死した彼の生涯において、これはいかにおそく訪れた栄誉であったことか。もし、青年時代に高等文官試験の最終試験を第二位の好成績で突破していたとしたら、その明末の歴史と志士・遺民に対する興味はうすらぎ、性格も円満になり、あるいは貧困から救われていたかもしれないが、彼が世に容られた時には、すでもう翻身が不可能なほど、今日知られる戴名世になりきっていたのである。それ故この栄誉は、戴名世にとり非常に危険なものになってきた。彼をすね者として警戒していた高官たちも、民間の文豪であったうちは、妬んだり陥れたりはしなかったろう。その文章を売り、家庭教師や幕客を勤めあげた金で、康熙四十一年五十歳の時に、ようやく故郷の桐城具南山に五十畝の田と宅地一区を入手し、隠棲の用意は整ったのであるが(なお南山集の名はこの時期に、弟子尤靈鶴の手で出版されたため命名)幸か不幸かたまたま晩年になり立身出世の道が開けたために、人の注意を牽くはめになった。進士及第者のうち、その二番・三番には、天子の側近く仕える翰林院編修を授けられるのがしきたりであった。新編修になって三年目の康熙五十年、五十九歳の時に南山集の獄は起ったのである。彼を告発したのは当時左都御史に移ったばかりの趙申喬で、清官の聞えたかくのちには大臣にまで出世する男である。『碑伝集』所収の「故資政大夫戸部尚書趙恭毅公申喬事状」にいう、「二十年授河南商邱縣、在官刻苦自厲、案牘悉手治、每中夜不寝、日出視事、意日夕無留獄、有投牒者一識、面數年不忘。」

精励恪勤の手のような勤務ぶりである。およそ文士氣質の戴名世とは対照的な性格であり、処理態度だった。四十一年浙江巡撫に遷り、四十八年秋には益謨と相争そい、帝の支持を得ている。「聖祖以江南巡撫張伯行爲總督所誣、詔論天下清官。因言趙申喬居官甚清。但有性氣、人皆畏其口直、与益謨互訐。彼時亦有以申喬爲非者、朕徐加察訪、即彼所轄武官但言益謨之非、無有以申喬爲不是者。嗜微聖祖知公、公之得舉久矣。」

ただみずから清くするのはいいが、人の非を見逃すような度量はない。その私生活も「四十一年正月、上曰、趙申喬居官甚清、所有家人僅十三人、並無幕客。」のような清廉ぶりが帝の眼にとまり、浙江巡撫に拔擢された経歴の持主である。この趙申喬に睨まれたのが不幸だった。

『古学彙刊』所収の「記桐城方戴兩家書案」にいう。「辛卯冬十月丁卯、左御史武進趙申喬、執南山集奏參。原奏云、題爲特參狂妄不謹之詞臣、以肅官方以昭法紀事欽。惟我皇上崇儒右文教尚正学訓飭士子、天語周詳培養人材、隆恩曲至普天下。沾濡德化者、無不下

格循坊檢懷畏章程矣。乃有翰林院編修戴名世、妄竊文名恃才放蕩、前為諸生時私刻文集、肆口游談倒置是非、語多狂悖逞一時之私見、為不經之亂道、徒使市井書坊翻刻貿鬻射利營生、識者嗤為妄人、士林責其乖謬。聖明無微不至察諒俱在洞鑒之中。今名世身膺異數叨列巍科、猶不追悔前非、焚削書板。似此狂誕之徒、豈容濫廁清華。臣与名世素無嫌怨、但法紀所關何敢狗隱不言。為此特疏糾參仰祈勅部嚴加議處、以為狂妄不謹之戒、而人心咸知悚惕矣。伏候皇上睿鑒施行得旨。」

この清官は法を守ることは知っているが、残念ながら民族意識には欠けていた。性格の違いもあり、名世の言動がいちいち問題になってくる。一方、明季三王の年号を使って告発の因の一つになった「与余生書」で、いみじくも「近日方寬文字之禁」と書いているように、戴名世の側に情勢判断の甘さがあったことも明かである。また文を売って暮しを立てるのは、名世若年のころからの生活法であり、世の中にその文を求める者がある限り、自分の生活の道をみずから閉す気にならなかったのも当然といえよう。趙申喬はいざ知らずほかの多くの官僚たちが賄賂をむさばり、人民を搾取して蓄財にはげんでいる事実を熟知している戴名世は、自分の生活態度に誇りを感じこそすれなんのやましい思いも抱かなかつたに違いない。その彼が獄につながれ、自白を強要されたのである。では法廷では、いかなる事実が述べられたか。

「記桐城方戴兩家書案」には、戴名世の自供書が掲載されている。これは係の筆記に依るものらしく、口語で記録されている。

「予遺錄 方正玉刻的。南山集係尤雲鵬刻的。雲鵬是我門生。我作了序、放他名字。汪願・方苞・方正玉・朱書・王源序、是他們自己作的。劉巖未有作序。我与余生書內有方學士名、即方孝標。他作的滇黔紀聞內載永歷年号、我見此書即混写悖乱之語、罪該万死。」  
その弟子、尤雲鵬は自己の立場を弁解している。

「我先生戴名世書、见我銀子刻的。序文是我先生作的。……查戴名世書內、欲將本朝年号削除、写入永歷大逆（等語）。」（『等語』は記録者の要約か）

その外、事に坐した者は、ほぼ事実をそれぞれに自白しているのである。

蕭穆の「戴憂庵先生事略」では、告発した趙申喬を攻撃し、その周辺の動きと結末を次のように記録する。「至康熙辛卯冬、武進趙都諫申喬、抱南山集題參而同時又多忌先生名者力擠之。故当时仁廟方拔起天下英偉之才、相國安溪李公雅重先生、欲疏救於万死一生之

地、卒不可得。然尚頼仁廟寬仁、減吏議極刑改死罪。而已牽連三百余人悉為保全。而先生宗族及子弟悉蒙寬宥。方氏遣戍及隸旗籍者、雍正元年恩詔均為宥赦焉。」

文中の李雅重とは、いうまでもなく李光地であり、門弟の生命を救うために帝への影響力を行使したのだった。李光地がどのくらい帝に信頼されていたか。前出の「李文貞公事状」によれば、「凡御定諸書多委公。參定中有淆蹟、往復陳請不倦。故最後聖祖詔廷臣言、知光地者莫若朕、知朕者亦莫若光地矣。」

と記されているほど、帝との間に心の交流があった。その李光地の懸命な弁護の結果、戴名世は凌遲の極刑からただの死罪になり、その遺体も弟の輔世に引渡され、故宅南山岡硯莊の南に葬ることができたのである。刑死したのは康熙五十二年の二月十日、数えて六十一歳であった。

方苞もやはり李光地の弁護により死をまぬがれたばかりか、かえって側近く仕える機会をつかんだのは前述のとおりである。帝は武英殿総管に、「戴名世案内方苞、学問天下莫不聞。可召入南書房。」(方苞「兩朝聖恩錄」に詳しい)とお命じになった。これこそまさしく破格の待遇である。編修の劉巖などは序文を書く約束だけで実際には序文を書かなかつたのに、免職のうえ流されているくらいである。桐城の文壇はこの事件以後、ついに方苞を中心に展開するようになるのである

## 五、

次に二人の友人関係に、すこしく注意をはらうことにしよう。その内面生活を知るためには、彼等が赤裸々に自己をさらけだし、切磋琢磨しあった場において彼等をとらえなければならぬ。ただし中国の文学は、ことに詩と文章においては、直接間接に友情を語る作品がその主要な部分を占め、友情の文学の異称さえあるくらいであるから、彼等の文学を説くのにこの面からも照明をあてる必要があろう。

まず最初に戴・方二氏に共通する友人を挙げ、もっとも顕著な例について述べてみたい。劉言潔・王真繩・朱子綠・徐貽孫・劉巖・劉捷は彼らの良友であった。劉言潔を語る文章には劉氏に「与劉言潔書」「贈劉言潔序」「徐貽孫遺稿序」があり、方氏に「与劉言潔書」

「四君子伝」をはじめ、断片的ながら彼を語る無数の記述がある。王崑繩については戴氏は「蔡瞻岷文集序」「贈劉繼莊還洞庭序」中で触れ、方氏に「与王崑繩書」「祭王崑繩文」があり、朱字緑については戴氏に「朱字緑序」「杜溪稿序」、方氏に「朱字緑墓表」「朱字緑文稿序」があり、徐貽孫については戴氏に「徐貽孫遺稿序」があり、方氏に「与徐貽孫書」「徐貽孫哀辞」があり、劉巖については戴氏に「与劉大山書」があり、方氏にもやはり「与劉大山書」がある。劉齊、字は言潔、性はなはだ耿介を以て知られている。顧炎武の甥で学界官界に絶大な勢力を振っていた時の大臣徐乾学の入門勧誘を「閨女詞」五章を作り謝絶しているような硬骨漢である。権貴におもねらない彼のために方苞は「狷者劉言潔之墓」と書いたくらいであるが、この劉言潔には方苞すら宋学の方面で啓発されている。「再与劉拙修書」にいう、「僕少所交、多楚・越遺民、重文藻、喜事功、視宋儒為腐爛、用此年二十、目未嘗涉宋儒書。及至京師交言潔、与吾兄勸以講索、始寓目焉。」この劉齊をふくむ四人の友人について語った文章に「四君子伝」がある。これは南山集事件より後、康熙五十六年の執筆であるから、もちろん戴名世の名前はそのなかにない。劉齊のほかには王源・張自超(註20)・劉捷があげられているがすでに世を去り故人を記念する文章のある者は除いてある。徐貽孫にも哀辞を捧げているので、ここでは名前だけを挙げてゐる。この徐貽孫・劉言潔・戴名世・方苞の君子の交については、戴名世の「徐貽孫遺稿序」に詳しい。また同じく「自訂時文全集序」にその交遊のあとがしのばれる。

彼らはほぼ宋学の学統を継承し、唐宋の古文を尊重し、それに精力を注いだ。狂士と呼んだのはわずかに八股文で満足し、立身出世主義に立った連中だったろう。これがまた、彼らの内的結合を強めたのは争そえない。彼らは痛切な批評をし合い、励まし合った。そのもっとも顕著な例として方苞が逮捕された時の、劉捷の行動をあげておこう。方苞はいう。「及余以南山集被逮、冒危険以急余、如所言。辛卯鄉試為拳首、以隨部檄、挈余妻子北上、失会試期、後遂絕意進取。」(「劉古塘墓誌銘」)方苞にはほかにも「与劉古塘書」がある。友人の危急のために、立身出世の機会を見逃したのである。けだし義人といふべきであろう。

以上、戴名世と方苞の家庭環境、先輩友人関係についてひと通り観察して気付くことは、方苞の父方仲舒とその友人錢澄之、杜濬、杜芥および戴名世の曾祖父孟庵に遺民の風があるが(万斯同のごときは遺民の気風を多分にもっていたので、この列に加えるべきか)その外は程度の差こそあれ、すべて清朝の支配体制下で自己の進路を切り開いていった人々である。といつて漢民族としての誇りも忘

れたわけではない。青年の頃から危険人物視され勝ちな戴名世を支持し激励してきた人々のうちには、その罪が確定してのちも、救助運動を止めなかったほどの硬骨漢すらある。異民族を支配するためには強硬手段と恩愛の使い分けが大切であるが、この間隙を縫って彼らはものを書き、また専政君主の前で主張すべきことを主張している。それからもうひとつ、彼らの連帯感を支えていたものは、時文全盛下における古文家としての自覚、<sup>〔註21〕</sup>あらたに勃興しようとする考証学派を目の前にしての自衛の性格もあつたのではなからうか。ではその古文の代表作家であつた戴名世と方苞の散文は、どのような主張のもとに書かれ、どのような特色を持つか、この点に今度は焦点を合せることしよう。

## 六、

戴・方両氏の文学の相似は、以上述べたような環境の相似から容易に予想されるころであるが、二人を区別するなによりも大きな文学上の態度は戴氏のひらめきを重視するのと対照的な方氏のリゴイズムにある。戴氏には道的でない要素が認められるが、なによりもまず道の文学というところに方苞文学の本領がある。前者がやゝ華麗な表現を好むのに対して、後者は素朴にして簡潔な写実を心掛ける。その文を説く言葉のうち、代表的な例を挙げれば、戴氏は「成周卜詩序」において次のようにいう。

「余少而学文、恥為趨時之作。有里老謂之曰、『女之所好者、何境可以象之』余曰、『遠縹緲秋水一川寒花古木之間、空濛寥廓独往焉、而無与徒也。』里老父曰、『雖然富与貴也無望於女矣。』自是以後、余之所為文、末知果能有此境与否。」

また「張貢五文集序」では、「始余之從事於文章、年不過二十。一日山行遇一売菓翁、相与語因及文章之事。翁曰、『為文之道、卒贈君兩言、曰割愛而已。』余護心之。已而別去私自念翁所言良、是掃視所為文、見其辞采工麗可愛也。則皆可割也。如是而吾之文其可存者、不及十二三矣。……余自聞此論而文章之真諦秘鑰、始能識之。」と。

いずれも問答体で、やゝまとまった考えを発表している。「余生平論文、多否、少可。」<sup>〔二〕</sup>「楊千木稿序」という意見の持主である彼は、もとより文章の理論家ではない。自分の信ずるところを語るにも、他人の言葉に仮託する控い目な形をとっている。あるいは隠士に行合つたのかも知れないが、その名も記していないところを見ると、山林を愛した戴名世の趣味がこの表現を生み出したのではなからう

か。戴名世には「一壺先生伝」に見られるように「不知其姓名、亦不知何許人」の仮空の伝を立てて喜ぶ面があるからである。この名世が從横無尽に文を論じたのは、おそらく「小学論選序」ぐらいのものである。そしておなじことを、やゝ篤実に論じた文章には「答張伍両生書」「与劉言潔書」があるが、「答張伍両生書」にその精神傾向をあわせ示す章があるので、まずそれから紹介すると、「蓋余昔嘗誦道家書矣。凡養生之徒、從事神仙之術、滅慮絶欲、吐納以為生、咀嚼以為養。蓋其說有三、曰精、曰氣、曰神、此三者、鍊之凝之、而渾於一。於是外形骸、凌雲氣、入水不濡、入火不熱、飄飄乎御風而行、遺世而遠舉、其言云爾。余嘗欲學其術、而不知所從。及竊以其術而用之於文章。」とし、司馬遷以下古人の名を挙げてこの説を補強し、最後に「今夫神仙之事、荒忽誕、謾不可信。得其術而以用之於文章、亦足以脱塵埃、而游於物外矣」と。

彼は「与劉言潔書」では、自得の重要性を、ここでもやゝ神秘的な態度でこう語る。「今夫文之為道、未有不讀書而能工者也。然而吾所誦之書、而吾拳而棄之。而吾之書固已誦、而吾之文固已工矣。夫是故一心注其思、万慮屏其雜、直以置其身於埃壙之表、用其想於空曠之間、游其神於文字之外。如是、而後能不為世人之言。不為世人之言、斯無以取世人之好。故文章者、莫貴於独知。」と。

いまのわたくしには戴名世の文説を、他の文章の流派と比較して論ずるだけの用意を持たないが、青木正児博士の『清代文学評論史』に同時代人の類似の文説を探った限りでは、とくに神仙の術の応用の理論において特異である。方苞のあまりに儒教的な義法理論とは、かなり異った発想をとっている。博士の義法の説明を借りれば「つまり義理則ち文の内面的理法と文法即ち文の外形的法則」であり、「而して『義』は儒教の道義特に孔子の『春秋』の義を根柢として、いわゆる『載道』を説を堅持した。『法』は『春秋』褒貶の筆法の意を体して、『左伝』史記』より降っては唐宋八家の古文の法を宗とし、此の兩者相表裏し相関連して文を評し、又作る可きを主張するのが『義法』である。」ということになる。桐城古文の基本理論として知られる義法の説が、他の何人かの影響をうけて成立する可能性があるとするれば、その周辺におけるもっとも有力な古文作家としての戴名世にその一つの可能性を仮定したのであるが、現存の南山集などには、その証拠はついに発見されなかった。もちろん義法という言葉はでてこない。そこで同理論の確立における方苞の創造的役割は、いよいよゆるぎないものとならざるをえない。ではこの二人の作品活動において、彼らの理論はどのように反映しているだろうか。いかなる題材を好んで選び、それをどう処理しているだろうか。南山集事件後の方苞は、どう変ったろうか。桐城文



学にあつた可能性が、この事件でどう道を鎖されたか。尊明の遺風からの脱脚、そして清風の確立——については桐城文学内部にすら考証学との妥協を計る風潮を生むに至る——のは、このあたりから考察する必要があるようにおもわれるが、清初の転換点にあつたな照明をあてるのは、なお今後に残された問題である。

註1 桐城・蕭穆「戴曼庵先生事略」では錢澄之まで溯る。桐城經学文章之端緒、開自錢先生田間、後望溪方侍郎昌而大之。先生亦自幼殫精經史、得禍後多所未究其緒論、惟見之於遺文。また劉声木の「桐城文学淵源考」では、帰有光まで溯る。

註2 『記桐城方戴兩家書案』：又乾隆四年詔修明史成。又數年、高宗純皇帝復特諭申以後存福王年号、丙申以後存唐王年号、戊子以後存桂王年号戴名世には「上韓宗伯書」「再上韓宗伯書」があり、しきりに韓奕に近づこうと努力している。

註3 『南山集』「葵齋賦文集序」にも戴氏と万氏の交際についての記述がある。「……余客游四方与士大夫交遊、而求學者於時文之外、求功名於制科之外、頗得數人焉。於浙江則得万君季野……」

なお方苞と万斯同の交友については、拙稿「方苞の散文」(『芸文研究』第12号)を参照されたい。

註5 「齊天霞稿序」：歲乙酉、天霞學於京師明年成進士。其同年生方君靈臬為刊其稿於金陵、而取蘇署所作若干篇附之。……若夫天霞之文奇矯、蘇署之文清駁、靈臬之論如此、余無以易其說焉。

註6 「与劉大山書」：同臬方苞、以為文章者、窮人之具、而文章之奇者、其窮亦奇、如戴子是也。僕文章不敢当方君之所謂奇、而欲著書而不得。此其所以為窮之奇也。

註7 「徐詒孫遺稿序」而詒孫最善方靈臬、靈臬与余同臬、最親愛者也。詒孫介靈臬以交於余、而靈臬介余以交于言潔。此數人者、持論斷斷、務以古人相砥礪、一時太学諸生、皆号此數人為狂士。已而詒孫言潔、相親締。而余与靈臬、以亮文留滞京師。歲丙子冬、聞言潔之訃、余与靈臬為位而哭。

明年春、余酸金婦葬言潔、而靈臬亦兩遺。……詒孫故有幽夏之疾、不能自解釈、靈臬嘗指余以示之曰、「君不見戴子乎、所遭極人世至窮之境、而不至戕其生者、能自解釈故也。吾子不從吾言、必發狂且死、可不戒哉。」詒孫聞之懼然自失也。靈臬之言卒果驗。……余与靈臬每追憶旧遊、未嘗不涕淚之橫集也。

註8 「自訂時文全集序」：宗伯韓公、折行輩与余交、而深惜余之不遇。同臬方百川靈臬、劉北固、長洲汪武曹、無錫劉言潔、江浦劉大山、德州孫子未、同郡朱字稼、此數人者、好余文特甚。靈臬年少於余、而經術湛深、每有所得、必以告余。余往往多推類而得之。言潔好言波瀾意度、而武曹精于法律。予之文、多折衷于此三人者而後存。今集中所載者是也。

註9 「乙亥北行日記」七月初一日、宿良鄉、是日過涿州、訪方靈臬於舍館、適靈臬往京師。在金陵時、日与靈臬相過從、今別四月矣。擬為信宿之談而竟不果、及余至京師、而靈臬又已反涿。

註10 「方逸異詩序」逸異方先生有二才子。日舟、日苞、皆工為文章。一落筆輒名天下、而先生工為有韻之言、跌宕淋漓雄渾悲壯有古人之風。人皆謂

方氏父子或工於文或工於詩、各極其盛而不能相遜。吾嘗侍先生側竊聞先生之論詩矣。…吾与先生二子過從甚密。

註11 「方百川稿序」金陵之城北有二方子、曰百川、曰靈臬、兄弟皆有道而能文章者、靈臬之文、雄渾奇傑、使才人皆廢。而百川之文、含毫渺然、其旨雋永深秀、兩人皆原本于左史歌謠、而其所造之境詣、則各不相同也。靈臬客遊四方、其文多流傳人間、百川閉戶窮居、深自晦匿、世鮮有見其文者、要其文淡簡、亦非凡近之所能識。以故百川声稱寂寞、甚于靈臬。頃余家青溪之漚、距二方子四五里而近。時時相過從、得尽誦兩人之文。往往循環雜誦、不忍厭去。…而靈臬自涿鹿貽書于余曰、知吾兄之深者、莫如戴子、是宜為文以序之。方苞から戴名世宛の書簡が存在したはずである。

註12 「方舟伝」…舟与其弟苞皆好學、日閉戶謝絕人事相与窮天人性命之故、古今治乱之源、義利邪正之弁、用以立身行己。而以其緒余著之於文、互相質正、有一字之未安不敢以示世。

註13 「辛巳浙江日記」十二月初六日、啓行往嚴州、次日未至蘭溪、而余有僕自桐城來、相遇於次。知友人方百川病卒、為之大慟。

註14 「程僊柳稿序」昔者余亡友方百川氏之論文也曰、文之為道須有魂焉以行乎其中。文而無魂焉不可作也。余嘗推其意而論之曰、…

註15 同時代人の顧炎武は「書吳潘二子事」でいう。之深入京師、摘忌諱語密奏之、四大臣大怒、遣官至杭、執莊生之父及其兄廷鉞及弟姪等、并列名於書者十八人皆論死、其刻書齋書、并知府、推官之不發覺者、亦坐之。發廷鐘之墓、焚其骨、籍没其家產。所殺七十餘人、而吳潘二子与其難。

註16 戴名世「先君序略」にいう。曾祖弱冠為諸生有聲、後國變難髮服僧衣入電眠山中不出、年七十五以庚戌年卒。時名世已十七歲矣。

註17 この方向の文に「日本風土記」がある。明末日本に救援を求める風潮を受けた文章。「楊劉二王合伝」をはじめ抵抗者の伝多し。その胸中を吐露したものに「与劉大山書」…而僕無他嗜好、独好此不厭。生平尤留意先朝文獻。二十年來、蒐求遺編、討論掌故、胸中覺有百卷書、怪怪奇奇、滔滔汨汨、欲触喉而出。

註18 方苞に「吏部侍郎姜公墓表」がある。方苞の挙人試験の際の主試である。

註19 もちろん戴名世は、まったく警戒していないわけではない。「与劉大山書」では『南山集』刊行にあたっての、心の動きを伝えている。今年冬有金陵門人、欲錢僕古文於板。僕古文多債時嫉俗之作、不敢示世人、恐以言語獲罪。而門人遂以彼所藏抄本百篇、雕刻行世、俟有刊成。また当の名世の「天籟集序」には、明の遺民の子孫が、父祖の遺著の刊行を拒む事実が述べられている。名世も危険は自覚していたはずである。

註20 方苞「四君子伝」余弱冠、従先兄百川求友、得邑子同寓金陵者曰劉古塘、於高淳得張驥歎。

註21 戴名世「与劉大山書」当今文章一事、賤如糞壤。

追記…第二章と関聯して次のことを附加しなければならぬ。

戴名世を宋濂の異名で呼び、文中でふれた文章が方苞には他に九篇あることが最近分った。